

小松帯刀に学ぶ目的への柔軟さ

鹿児島では、海上の航海安全をつかさどる神・媽祖（姥媽・天祖とも）を「ロバさん」と呼ぶ。

もともとは、中国福建省莆田県湄洲島の、天后宮を本宮として、中国の南部沿岸地方で信仰された安産の女神であった。

ロバさんは、「姥媽」を日本読みしたものであろう。

江戸時代、野間岳の西宮に、ロバさんは祭られていた。地域の人々だけではなく、沖を行く中国船・琉球船も航海の無事を祈願したという。

無論、薩摩に立ち寄った「亀山社中」の面々も、柄にもなく心からの祈念をしたにちがいない。

元治元年（一八六四）十月二十二日、神戸海軍操練所を主催し

ていた幕府軍艦奉行の勝義邦（海舟）が、八二八クーデター、池田屋騒動、禁門ノ変、第一次長州征伐とつづいた、幕府の攻勢（池田屋以外は薩摩藩の力による）を背景に、謀叛の疑いをかけられ、江戸へ召還された。

残された行き場のない脱藩浪士、とくに土佐藩脱藩者たちは、坂本龍馬の甥・高松太郎を代表者として、西郷隆盛・大久保利通の上司であった小松帯刀に保護を頼んだが、帯刀はこの浪士たちを使つて、「亀山社中」を創ることを考えた。

彼らは土佐に帰ることもできず、二方で新撰組の浪人狩りに追われている。しかし、航海術はもっていた。これを使わぬ手は

ない。

当時、薩摩藩は国父・島津久光が江戸入りの帰途、横浜生麦村で行列を横切ったイギリス人を無礼討ちにし、それがもとで薩英戦争（文久三年＝一八六三年七月）を戦った直後であった。

事実上、薩摩藩の海軍は、潰滅的な損害を被っており、その再建が急がれる状況下にあった。

帯刀はそのあたりのことも踏まえて、「亀山社中」を「貿易の手先」として利用すること、との良策を考えたわけだ。

幕末の薩摩

藩は、常に柔軟であった。幕府と組んだかと思えば、



小松帯刀像 宝山ホール（県文化センター）前

連合もしている。目的と手段を履き違えず、常に感情論を排して冷静に、最善の策を採用する度量を持つていたといえよう。

ちなみに、「亀山社中」は破算したが、薩摩藩の貿易高はあがっていた。のちの、明治の海軍も独占している。

結局、儲けたのは一人、薩摩であった。



PROFILE 加来 耕三氏

奈良大学文学部研究員を経て、現在は大学・企業の講師を務めながら、歴史家・作家として、独自の史観に基づく著作活動を行っている。その他、専門知識を駆使し、時代考証はもちろん、テレビ・ラジオ番組で監修・出演などを幅広く活躍している。